

令和 7 年度

第 1 回総合教育会議
会議録

とき 令和 7 年 4 月 2 2 日

品 川 区

令和7年度第1回品川区総合教育会議

日時 令和7年4月22日（火） 開会：午後4時00分

場所 品川区役所 本庁舎5階 第五委員会室

出席者	区長	森澤 恭子
	副区長	新井 康
	教育委員会教育長	伊崎 みゆき
	同 教育長職務代理者	吉村 潔
	同 委員	稲垣 百合恵
	同 委員	濱松 誠
	同 委員	吉原 幸子

出席理事者	区長室長	柏原 敦
	総務課長	藤村 信介
	子ども育成課長	三輪 貴大
	教育委員会事務局教育次長	米田 博
	同 庶務課長	船木 秀樹
	同 学校施設担当課長	荒木 孝太
	同 学務課長	石井 健太郎
	同 指導課長	酒川 敬史
	同 教育総合支援センター長	丸谷 大輔
	同 特別支援教育担当課長	新井 正康
	同 教育施策推進担当課長	唐澤 好彦
	同 品川図書館長	三ツ橋 悦子

傍聴人数 なし

次第

1. 開 会
2. あいさつ 品川区長、教育長
3. 講 演
(講演テーマ) 放課後からの教育改革
(講師) 特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール
代表理事 平岩 国泰 氏
4. 意見交換
5. 閉 会

○区長室長

それでは、定刻になりましたので令和7年度第1回品川区総合教育会議を始めさせていただきます。

品川区総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4に基づきまして区長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、品川区の教育の課題等について協議・調整を行うことにより、相互の連携をさらに強化することを目的として開催するものでございます。

本日、傍聴の方は現在お越しになっていません。

本日の会議におきましては、記録用にカメラ撮影をさせていただきますので御了承いただければと思います。

森澤区長でございますけれども、現在、公務の都合で若干遅れておりますので、後程参ります。

それでは次第に沿いまして、進めさせていただきます。

まず、ご挨拶のところでございますけれども、新井副区長の方からご挨拶をいただければと思います。よろしく願いいたします。

○新井副区長

森澤が遅れているものですので、代理でご挨拶させていただきます。

本日はお忙しいところ、今年度第1回目の総合教育会議にご参集いただきまして誠にありがとうございます。

本日の総合教育会議では、特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール代表理事であります、平岩国泰様にお越しいただきまして、NPO法人代表理事や渋谷区の教育委員などを務められているご経験から感じる、「放課後からの教育改革」についてご講演をいただきます。

お忙しいところお越しいただきまして誠にありがとうございます。

現在品川区には、全児童を対象として運営するすまいるスクールですとか、区内25ヶ所の児童センター、生きづらさを持つ子どもが利用する子ども若者応援フリースペースなど、様々な子どもたちの居場所がございます。

また、地域とともにある学校づくりを目指す「品川コミュニティ・スクール」におきましては、地域と学校が連携して子どもたちを育てていくという仕組みを通して、地域人材の有効活用や、地域の教育力の活性化を図り、児童生徒の健全育成に取り組んでいるところでございます。

他方、区では今年度、「品川区子ども計画」を策定しまして、社会全体で子どもと子育てを支える「子育ての社会化」を更に進めているところでございます。

そのような様々な施策を通して、子どもたちが家庭の状況に左右されず、自分の望むように生き、幸せを感じられる社会を実現して参りたいと考えているところでございます。

本日の平岩様のご講演から、子どもの居場所についてはもとより、教育改革に係る新たな知見を得て、今後の品川の教育の在り方を考える契機とした

いというふうに考えているところでございます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

○区長室長

ありがとうございました。

続きまして、品川区教育委員会を代表いたしまして伊崎教育長からご挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

○伊崎教育長

品川区教育長の伊崎でございます。

本日はお忙しい中お越しいただきありがとうございます。

平岩さんとは、私がすまいるスクールの担当課長だったときに、シンポジウムにお呼びいただきまして、僭越ながらお話しをさせていただいたというつながりがありまして、それから10年が経過しました。本日は、平岩さんから素晴らしいお話が聞けるということで楽しみにしております。

品川区では、今年度から、教育振興基本計画を施行しまして、その中でのビジョンを「子どもたちの笑顔でつながる共生社会 ～みんなのウェルビーイングを目指して～」と位置付けております。

子どもたちが、困難を乗り越える力とか、知識や技能を活用して、前向きな態度と価値観を持って、社会における複雑な課題を解決する力を身に着けて、自ら主体的に目標を設定してウェルビーイングを高めていくとともに、社会全体のウェルビーイング実現の担い手となるということを目指しているものです。

ウェルビーイングは子どもたちだけで育てていくのではなく、教員や社会、また地域の皆様とともにつくり上げていくものでありますので、本日「放課後の教育改革」ということで、子どもたちが生活している場である学校以外の居場所においても、子どもたちのウェルビーイングが高められるような対応をこれで作っていったらいいなと思っております。

取り組みについていろいろ勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○区長室長

ありがとうございました。

申し遅れましたが、本日進行を務めさせていただきます区長室の柏原でございます。どうぞよろしく願いいたします。

それでは次に、講演の方に入って参りたいと思います。

本日は特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール代表理事であります、平岩国泰様にお越しいただきまして、「放課後の教育改革」をテーマとして講演いただきます。

平岩様についてご紹介させていただきます。

2004年にお子さんの誕生をきっかけに、放課後NP0アフタースクールの活動開始。

子どもが主体的に過ごせる居場所づくりや、すべての子どもの体験機会の創出をテーマに活動することによって、子どもたちの成長を応援しております。

現在は、特定非営利活動法人放課後NP0アフタースクール代表理事の他、渋谷区教育委員教育長職務代理、新渡戸文化学園理事長などを務められています。

簡単ですがご紹介は以上でございます。

この後ご講演をいただきますが、質疑などは講演が終了した後にまとめて行いたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

また資料につきましては前方モニターの方にも投影しますので、ご確認いただければと思います。

それでは平岩様、どうぞよろしくお願いいたします。

○平岩代表理事

今ご紹介いただきました平岩と申します。

本日は貴重な場にお呼びいただきましてありがとうございます。

私も渋谷区の教育委員をしておりますので、総合教育会議の意味合い等々はよく理解しているつもりです。本当に貴重な場だと思いますし、こうした放課後というテーマを取り上げてくださったというのが非常にうれしく思っております。今日は私のNP0法人がこんな活動していますって話もあるんですが、全般的な放課後の課題ってのは何だろうというところを、皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

それでは着座にて失礼いたします。

先ほどご紹介いただきましたとおり、今日はNP0の立場で来ていますが、私立学校法人の理事長を1つさせていただいているのと、渋谷区で教育委員の方をさせていただいています。

先ほどご紹介ありました通り、僕自身、経済学部出身で全然教育畑ではなかったんです。ちょうど今20歳になる娘がいるのですが、娘が生まれて、その頃から活動をスタートして、1個目のアフタースクールを新渡戸文化学園で実施したご縁をきっかけに学校の方にも入ることになり、今に至っているということでございます。今日は、学校の話と放課後の話が入りまじるような部分もあるんですが、私としてはそこをポジティブにとらえており、聞いていただければと思います。

ここから小学生の放課後のお話になります。

課題の全体像としては、一番上に子どもたちのウェルビーイングに関する課題、品川区でも掲げられていますけれども、やはり日本の子どもたちは経済的には豊かなはずなのだけれども、心の豊かさについてはどうかというところがポイントになっています。

その1つの背景に、放課後の過ごし方もあるのではないかなと思っていて、課題を3つとらえており、中身を話していきますので頭の中にこの構図をぜひ意識してください。

まず子どもの課題です。皆様もご覧になっているかもしれませんが、残念ながら小中高生の自殺が増えているというデータがあります。年々増加をしていて、10代の死因の1位が残念ながら日本は自殺ということになってしまっています。G7では日本だけです。大人の自殺はずっと減っているのですが、子どもの自殺が増えている。昨今若年化されているようなことも言われ始めていて、それが小学生あたりで出てきてしまっているようなことも言われています。

幸福度調査をとると、ユニセフでは日本は20位というデータがありますが、健康面は1位です。心の面が38か国中37位です。この真ん中をとって20位になっているわけですが、心の面はどうしたの、と心配になります。

また、自己肯定感が低いというのも皆さんよく聞かれるデータかなと思いますが、確かにデータ上は、大体厳しい結果が出ています。注目なのが、自己肯定感がいつ下がるのかという調査を以前東京都がされたのですが、これを見ると小学校の1年生から下がり始めていて、小3と中1あたりで割と大きく下がっているように見えます。ですので、この小学生時代の6年間で、実は自己肯定感のところではなかなか難しいかなという状況です。皆さんもご覧になって小学校高学年に対して少し元気がない感じがしませんか。塾なんかも含めて、やはり都会の子は、小学校高学年で苦勞するという感じがあるかなと思っております。

日本財団の18歳意識調査を見ると、将来への希望が非常に低いというのがあります。

先ほどの自己肯定感は控え目な日本人の国民性が要因かなと思うのですが、将来への希望は国民性関係なく厳しいかなと思います。もう1つ、自分は大人だと思うか、自分の行動で国や社会を変えられるか、チャレンジ意欲や自己効力感も極めて低くて、かなり他国と差がある状態です。この質問は18歳に対してしているのですが、6歳の子どもの同じ質問はできないと思うものの、もしできたとすると多分あまり差がないのだろうと思います。そうすると小中高の12年間で差がつくのは、今の日本の教育の1つの姿ではないかと思っています。ここは真剣に受けとめたほうがいいかなと思っています。

そこに対して放課後です。先ほど申し上げた3つの課題の1つ目が3つの間が失われたということです。「時間、空間、仲間」の「間」をとって3つの間です。

私は昭和の生まれで、「時間、空間、仲間」にかなり恵まれた放課後を過ごしていました。これが放課後の象徴的な姿だと思うので、それと比較すると今の子どもたちは状況が変わったと言われています。

その背景としては、子どもが犯罪に遭ってしまう時間帯は、午後4時台が最多で、2時から6時の間に犯罪の7割が起きているという事実があると思

います。学校と放課後の間が狙われるので、親御さんにとってはとにかく放課後の安心というのが欲しい、安全安心な場所が欲しいのだと思われます。

外遊びの時間が非常に減っているというデータがあり、また放課後に1人で過ごした日数は何日ありますかという調査をしたところ、日本の子どもが5ヶ国のうち1人で過ごした時間が一番多かった。自由に友達と遊ぶ日って週何日あるのかを子どもにアンケートとりますと、ほとんどないが43%になります。すまいるスクールで遊ぶようなことは数えていません。自由に今日遊ぼうねって、友達と言い合って遊ぶ日が、昔の子どもは多分週5日あったと思うんですが、今、7割の子どもが自由に遊ぶ日は週1日以下という状況です。毎日のように自由に遊んでいるって子どもはほとんどいない状況ですね。

放課後を象徴する3つの間がなくなって、子どもらしい子ども時代を過ごす居場所というのではないのではないかというのが1つ目の課題から言えることです。

2つ目が小1の壁です。よくこの季節に新聞記事に出ます。私も取材依頼が増えます。皆さんもお聞きになったことがあるかもしれません。子どもが小学校に入学すると、仕事と家庭の両立が困難になってしまう。理由の1つに放課後の過ごし方があります。

保育園の時代は、朝から夕方まで保育園に居られますが、学校が始まると学校は早く終わります。

また、小4の壁といいまして、は学童が事実上小3までしかいられない状況があり、4年生以降の居場所に困る状況が起きています。代わりに塾に行くことが都会ではよく起きることです。最近学童が2年生ぐらいまでしか機能しないような状況があるので、小3の壁に下がったのではないかととも言われています。

小1の壁をテーマにした調査によると、半分の方が、お子さんが小学校入学のタイミングで働き方を見直したという結果でした。

なぜかという、7割ぐらいの企業が、小学校入学までしか時短勤務が使えない、小学校入学以降も時短勤務が使えるのは3割です。子どもが小学校に入ったときに「フルタイムでお願いしますね」というふうに言われちゃうと、放課後どうしよう、習い事どうしようという中で、仕事を諦めるという方がこのタイミングでいらっしゃるということになります。

ちなみに私の周りも特に母親の方で、小学校入学のタイミングで、非正規アルバイトに変わる方がいらっしゃいました。その方たちが、下のお子さんが中学に上がったからやっと正社員戻ろうかと考えたときに、50代ぐらいになるんです。結局そこで正社員の職を得られずに、非正規のままでいる事例が私の周りにはあります。

では、小1の壁をどう打破できますかという、配偶者の理解、職場の理解がまだ足りてないというところと、放課後の居場所というのが重要なポイントになってきます。

学童保育は2000年には39万人の小学生しか通ってなかったのが、直近では151万人まで来ていますので、非常に急増してきました。

施設も一生懸命増やしてきたのですが、追いつかなくて、保育園の方の待機児童は2018年の2万6000人がピークで、今はもう10分の1ぐらいに下がりました。

その間、待機学童は上がってきて、コロナで1度減りましたがけれども、また3年連続増加中ですので、厳しい状況にあります。

学童は、質の問題も指摘されています。「まるで鳥小屋」というショッキングなタイトルが記事についていますが、狭い環境で、ぎゅうぎゅうの状況というのは結構あります。

すまいるスクールは学校でいろいろと幅広く施設を使えると思うのですが、学校であってもプレハブで狭い状況になったりするケースもあって、学童に行きたくないという子どもが出てしまう場合もあります。そうなってしまうと親御さんは本当に困ってしまいます。量だけでなく質の問題もあるということですね。

小1の壁、背景を考えると、昔は小学校に入ったらもう安心ねってよく言われたと思うのですが、その時代から一部システムがアップデートされていないということが起きていることがあります。子どもが小学生のときの子育てってまだ非常に大変だという認識をぜひ皆様持っていただき、周りにそのような状況の方がいたら、大変みたいねという声掛けがあると、安心されるのではないかなと思います。

3つ目が、新たな時代の課題と言っていいと思うのですが、体験格差になります。

家庭の年収が上がっていくとスポーツとかキャンプとか楽器とかの体験が上がりますけれども、300万未満だと学校外の体験が全くないと答えている家庭が3人に1人ぐらいの割合であります。

こうした格差が、学校ではなくて放課後や休日に顕在化をしていきます。

そうした課題があるので、都会では民間学童保育というのがビジネスとして生まれてきています。

また、習い事の頻度について年収別に見ると、年収300万未満だと7割ぐらいがしていないと答えております。

また、年収が低いご家庭の子どもは友達と遊ぶ頻度も低いという結果もありました。

体験格差では、費用は厳しいことは当然ですがけれども、情報にアクセスできないとか、送迎する体力がない、ということも言われます。費用だけの話ではなくてトータルで解決をしなきゃいけないと思っております。

そしてそれを解決するために放課後の学校で子ども自身が習い事や体験活動ができるような環境ができれば良いのではないかと我々は考えてやっております。

最初にお見せした全体像に戻ると、放課後の3つの間が失われ、小1の壁

があり、体験格差があるという背景の中で、放課後に子どもが思う存分好きなことができない状況が発生しています。放課後だけで全部は解決できないですけれども、十分に子どものウェルビーイングに貢献できる可能性があるんじゃないかと思ってやっております。

そんな放課後の価値は、一言で言うと子どもの居場所だと思っています。

これは内閣府のデータですが、自己肯定感も将来への希望も、居場所1つ増えるごとに上がってきますので、放課後の居場所が1個増えるということはとても重要なポイントです。

放課後の時間は長いというデータがあります。学童連さんが出されているデータによると、小学校の低学年は朝の8時ぐらいから午後2時半ぐらいまで学校に居て、授業、休み時間、給食、全部入れて、子どもたちは年間1,200時間ぐらい学校にいるという計算になります。

一方、学童に通う時間はフルに行く場合ですけれども、平日の放課後、夏休みを数えていくと1,600時間になります。教育の話をすると、皆さんから学校で何とかしてほしい、学校で教育してほしいとよく言われるのですが、1,200時間しかないので、放課後の1,600時間をどう活用するかって考えると、少し見えてくる解決策もあるんじゃないかと思いますと思っています。

サッカーの世界でゴールデンエイジという言葉があります。小学校の高学年がゴールデンエイジで、人生の中でサッカーが一番うまくなる時期が小学校高学年に訪れるのだそうです。逆に言うとその時期にサッカーをしてないと一流のプレーヤーになるのは難しいと言われているらしいです。その時期は一番身のこなしを覚えるような時期だそうです。そのためには9歳ぐらいまでにさまざまな遊びをすることが大事です。

早稲田の前橋先生にお話をお聞きしました。「人間の体温が一番高いのが何時か」というと、午後4時だそうです。この時間にスポーツをすると一番記録が出るのだそうです。

子どもでも、この時間に運動しておくとか夜ぐっすり眠れるリズムが来るそうです。「4時ぐらいがゴールデンタイムですよ」と前橋先生はおっしゃっています。

それから、目の悪い子どもが増えています。研究で、外遊びを1日2時間ぐらいすると近視がかなり抑制できるというものがあります。中国や台湾ではかなり実証実験としてやっているそうです。2時間外遊びするのが難しくても、1時間は通学とか休み時間であるから、あと1時間ぐらい放課後で外遊びするのが大事だそうです。また、昼間の日差しはきつ過ぎてさまざまな問題があるので、夕方ぐらいの日差しで十分だとのこと。今近視が非常に増えてきていますので、こうした効果が実証されるといいなと思っています。

放課後の価値を私たちはこのように定義してしまして、一番中心に置いているのが「自分で選んで決める」ということです。学校の時間はどうしても何をやるかってことを選ばないところがありますけれども、学校ではそのよ

うな時間を過ごしてきたので、それらから放たれた後については、自由に過ごすというところで、自分で決められるってことを大事にしています。その中でチャレンジをしたり、没頭できたり、あとそれぞれみんな違うことやっ
ていいよねということなどを大切にしています。

あと、学校の先生ではない大人に会えたり、違う学校の子に会えたりとか、また、リアルな社会と繋がるような、そんなことができたらいいなと思っており、そうした放課後の価値を描いています。

学校と比べてみますと、学校はどうしても計画通り、予定通り、そして正解ということになってくるのです。放課後の方は、予定調和がありませんので、状況変化に対応したり正解がないからみんなで納得解を作ったりします。今、非認知能力と言われているジャンルに近いので、AI時代においては、放課後もとても大事です。学校の1,200時間と放課後の1,600時間が力を合わせるといいし、放課後は機動力があって改革が早くできますので、先にこちらから始めて、学校の方に影響していくということも十分あるかなと、私は思っています。

そんな中で、私たちの活動がここからのお話になります。法人は2009年にできましたので、16年ほど経っております。

スタッフが360人で、社員が100人ぐらい、アルバイトさんが260人ぐらいの組織です。

「日本中の放課後を、ゴールデンタイムに。」というミッションを掲げております。ちょうどこの時間、子どもたちの放課後の時間ですけれども、この時間が子どもたちにとって本当に楽しみだったり、自分のことを好きになったり、クラスではなかなか発揮できないいいところが発揮できたり、そんな時間にして欲しいと願ってやっております。

活動は主に4つやっております。1つ目がアフタースクールになります。

(アフタースクールの動画を視聴)

仕組みとしてはすまいるスクールと同じですので、皆様から見ると1歩前ぐらいの議論かなと思います。どんな活動をやっているかは、後ほど資料で補足をさせていただきます。

アメリカでアフタースクールという仕組みがあるのを知りまして、まさに学校施設をフル活用してNPOが運営をするという形でした。

アメリカの場合はどうしても学校外にあまり安全な居場所がないので、学校を活用するのがマスト要件なのかもしれません。学校の生徒の大半が放課後はアフタースクールに残っている感じで、1年生から6年生までみんなが
いる居場所になっていました。

この写真はロサンゼルスのアフタースクールですけど、校庭でダンスの練習をしていたり、テニスをやっていたり、食育をやっていたり、バンドの活動をやっている子たちもいて、本当に自由で楽しそうでした。日本でもこう

いうふうに放課後の学校を二毛作のようにもう1回活用して、さまざまな地域の人とやれたら面白いなと思いました。これだったら日本の放課後問題に役に立つかなと取り組んできました。

アフタースクールは、いつでも誰でも、共働きのご家庭に限らずどの家庭も毎日来ることができます。

そして学校を活用して多様な体験を、地域の市民先生や企業の皆さんと作っていて、一都三県で13校運営させていただいております。

学校施設をなるべくたくさん活用して、子どもたちと一緒に場所をつくっていくんだという感覚で運営をしています。

特徴としては市民先生ですね。家を建てる活動があれば、大工さんが来てくださる、という感じです。

大人だけじゃなくて、子どもからも市民先生がやりたいという声が生まれてきます。これは異学年だから生まれてくる姿で、学校のクラスではなかなかないと思います。これをすると、子どもが本当に育ちます。非常に緊張するらしいですけど、やると自分が誰かの役に立てる側に立っているんだという認識が変わるのだと思います。異学年って本当に大事だなって実感しています。

毎日、衣食住、スポーツ、音楽、文化、文化というのは日本の文化もありますが、外国の方がいらっしゃると外国の文化だったりしますが、プログラムを開催しています

また、学び、遊び、表現などですね、さまざまな形でアフタースクールの中でプログラムを行っておりまして、子どもたちのいいところを必ず見つけようというふうに思っています。

学校のクラスで発揮できている子はいいんですけど、なかなか発揮できない子も必ずいます。みんな絶対にいいところがあります、あとどうしても同学年だとペースが合わない子も、放課後はペースが合わせられるので、結果として学校のクラスの方でも、それがいいリズムに変わっていくこともあります。そういう意味では学校のクラスだけで何とかしようとは思わず、放課後も使いながらやっていくといいのではないかなと思っています。

そんなことをやっていくと自己肯定感、チャレンジ意欲、友達がたくさんいる、親御さんが安心して仕事ができるなどの効果がうまれてきます。

加えて市民先生たちも元気になる。

このアフタースクールが子ども、保護者、学校そして地域の四方よし、というような状況をつくれていると思います。すまいるスクールもきっと同じようになっていると思っています。

2つ目の活動は、企業と体験活動を作っております。

企業は様々な資源を持っていますが、それを子どもたち向けにどう展開していいかのノウハウがありませんので、そこを私たちの方でお手伝いをしています。たくさんの企業と組んで、全国に届けることに取り組んでおり、北海道から沖縄まで毎年1万人ぐらいの子どもに届けております。

3つ目が、私たちのアフタースクールのモデルを、日本全国に広げることを行っております。

様々な自治体と関東・関西で組ませていただいて、放課後のお手伝いをしております。アフタースクールを導入してくださる自治体があったり、すでにやっている放課後をさらに活性化させようという自治体もあったりします。

放課後の人材育成では、放課後施設の運営者の方、子ども食堂をやっている方々など向けの勉強会を無料で参加できる形で開催しております。毎回1,500人ぐらいの方々が、北海道から沖縄までの全都道府県から参加されます。非常にニーズは高いです。

先ほどご紹介した自治体を補足しますと、この自治体では市内ほぼ全校にアフタースクールの仕組みが入ることを目指して進行しております。以前は学童と放課後子供教室をバラバラにやっておりました。

一番の特徴は学校で習い事をやっているところになります。

外で習い事をやると、月に7~8,000円くらいが相場ですけれども、学校内なので費用を落としていただくことを講師の方をお願いしております。

家賃がかからないし、宣伝費用もかからないからです。保護者の方からすると、送迎はないし安いしということで、「本当に夢みたい」というふうに言われます。

アフタースクールの利用料は月3,500円、学童として利用するとさらに5,000円となっております。全てのご家庭から少しずついただくようになっています。市の財政負担を考えて、同自治体は薄く広くいただく形になっています。

また、ご紹介した区の放課後はすまいるスクールと同じような仕組みがあるんですけども、体験活動が不足していました。なので、習い事を入れましょうということで、区全体を見る「総合コーディネーター」を立てました。そのコーディネーターが全校の習い事プログラムを探してきて、整えていきました。

この区はクーポンの仕組みも入れて、収入が厳しいご家庭は無料で参加できますので、体験格差の解消につながったと思っています。

英語とか理科実験、プログラミングなどやっており、今後バリエーションを広げて、放課後の中で習い事の機能が十分あるという状態に仕上げたいなと思っています。そうすると、土日が空いてくるかなと思いますので、親子で自由な時間が過ごせるとしております。

啓発とか調査のところでいきますと、国に放課後の優先順位を上げてもらうというところを提案しています。大臣にお会いできればお会いしますし、自治体の皆様の子ども計画の策定のお手伝いをすることもあります。

放課後は質をはかる物差しがないという問題があります。そのためにどこを改善していいかわからない状況が発生しておりますので、大学の先生と一緒に物差しを作ることをしております。

以前に番組に出たときに専門家の方が解説をつけてくださったのですけれ

ども、この考え方には非常に賛同しています。日本の場合、学童は親が働くために作ると考えられがちで、子どもにとって学童がどうあるべきか、という議論が少し後回しになっていませんかという指摘なんです。

海外に行くと子どもたちに学童に通う権利があるという考え方があります。親から離れた場所で子ども同士が遊んだり、おしゃべりをしたり、遊ぶ権利が子どもたちにはあるということです。学童保育も親が働くためだけではなくて子どもにとって必要な体験を提供するため、学校生活だけでは学べないことを学べる場を提供するために作りましょうという考え方です。日本はまだ、親が働くために子どもを預かるという考えになりがちですし、とにかく量が足りないから何とかしなければというところで止まっています。この考え方をアップデートしていくことを頑張っていきたいと思っております。

すまいるスクールについて考えてみますが、土台は完璧です。我々の業界では先進事例です。あとは子ども主体の運営と、活動の充実があると鬼に金棒だと考えております。総合コーディネーターを配置して、体験活動について区全体をコーディネートするような存在が出てくるといいなと思います。各校ごとだともったいない。A校でやっているけどB校でやってないとか、同じ講師が共有されないとか、そういう問題が出てしまうといけません。プログラム費用の無償と有償は区の財源次第ですが、薄く広くもらっておくと、費用が回ります。低所得家庭にクーポンを出してあげると、親御さんの送迎が不要になりますので体験格差が解消できる可能性があります。品川区には企業もあるし、区民のすばらしい資源もあると思うので、参画してもらおうと、一段上がったすまいるスクールが実現できると思います。ここで、居場所を見つけてくれる子ども、得意なことを見つけてくれる子どもも出てくるし、親子のウェルビーイングが実現できるかなと思っています。

品川区は、格差解消のところではすばらしい手を打ち続けておられるので、体験格差の解消とか小一の壁の突破をぜひお願いできるとうれしいなと思います。

続いて、放課後が良くなると学校が良くなる可能性について最後に言及したいと思います。

1つ目は、放課後のスタッフが先生たちをサポートできるということです。例えば、給食の時間にサポートに入ることはできそうです。

それから春休み明けの学校は4月6日ぐらいから始まるので、非常に多忙です。そのためゆっくり始めて、ちゃんと準備したいという先生たちの声をうけて、アフタースクールが朝から開ける期間を少し延ばして、学校の1学期の始業を遅らせるという事例があります。

2つ目が、不登校傾向の子の居場所にという話です。アフタースクールは、月曜日から土曜日までやっていますが、学校は金曜日までで、土曜日だけアフタースクールに来る子がいます。最近、朝の話題もありますよね。朝7時から開けて欲しいという話が。

ここに放課後スタッフを配置して、朝から校内フリースクール的にできる

のではないかとと思っています。

それから部活動の地域移行が進んだ場合、小学校の放課後の講師が中学校も兼ねるという可能性があります。

それから探究学習です。授業だけでは時間が足りなくて放課後にそのまま探究をやるケースがあるので、ここでうまく相性が合うと学校教育にも好影響です。学校内に学童があると先生と信頼関係がうまれますし、放課後が先に注意情報をキャッチするようなことってあります。

品川区の放課後はすでにゴールデンタイムかなと思いますが、益々そうになると嬉しいなと思っています。

どうもありがとうございました。

○区長室長

平岩様どうもありがとうございました。改めまして平岩様に大きな拍手をお願いいたします。

ではこの後ですね、平岩様にもご参加いただきまして、意見交換の方に入っていきたいと思います。よろしくをお願いいたします。

○森澤区長

ありがとうございました。すいません少し遅参失礼いたしました。

すごく放課後の時間にポテンシャルがある大事な時間だということを改めて認識をさせていただきましてありがとうございます。

大分質問があるんですけど、少し具体的な話になってしまって恐縮なんですけど、総合コーディネーターという方を置いている場合が多いということだったんですが、どういう方がされている場合が多いのか。1人なのか複数なのかというところ。

あとは、市民先生というのは、企業の場合もあるし、地域の人の場合もあるということなのかなと思ったんですが、それをどうやって見つけていくのか。また、実際の契約形態というか、どういう形でお願いをしているのかというところ。

あとは、ちらっと見えた港区さんの方で重度障がい児支援について、立ち上げみたいなことが書いてあったのでそのあたりについて。

このあたりをお教えていただければというふうに思います。

○平岩代表理事

総合コーディネーターは、区として委託を出している例があります。その区においては、受託された組織が18校の小学校の体験活動のコーディネートをしています。

1年目から全校ではなくて最初4校くらいで始めて、数年かけて全校展開をしていった形です。

保護者にアンケートをとってニーズが出てきたので、それを参考にアサイ

ンをしてやっています。

仕組みとしては、業者さんに直接保護者が習い事費用を払うようなモデルです。

総合コーディネーターが事業者の選定をして、質の管理をしています。

2つ目の市民先生は、個人から企業まで幅広いです。謝金でお願いするので、公立だと交通費ぐらいでお願いすることもあります。

継続でやったださる方と個人で1回だけくる方がいるわけなのですが、継続でやったださる方は、かなりお任せできます。

企業の場合は、基本的に企業が費用を負担してくれますので、子どもたちは無償でプログラムに参加できる形です。

3つ目にいただいた港区の重度障がい児の支援というのは、夏休みの活動としてやってきました。特別支援学校に行っている子たちの親御さんが、夏休みに参加できます。私たちは障がい者の専門団体ではなかったので、アートをやったりしました。さまざまな活動ができるところが新鮮だったようです。その子たちが、親御さんと離れる時間を作って、親御さんもリラックスをしてもらうような機会です。施設は、港区の体育館がある施設で、医療スタッフもついてやる活動を長年やってきました。

○吉村教育長職務代理者

今日はどうもありがとうございました。

本当に多岐にわたったさまざまな取り組みがあって、勉強になりました。

20年前に品川区がすまいるスクールを立ち上げたときに、私も品川の教育委員会事務局にいて、その立ち上げたときの組織は、教育委員会事務局の中にあっただんですね。それはやはり学校との連携が重要だということで、つまりあのころは、放課後のすまいるのところに先生たちも来るように、同じ子どもなんだからちゃんと様子を見てくださいというやり方をしていたと思うんですね。今は少しわからないんですけど、そういう学校との連携が必要だった理由に、放課後のところでも学校と同じように子ども同士のさまざまなトラブルというか、そういうのがあったんですね。

先ほどスタッフのニーズがあって研修の話をされていました。1,500人ぐらいの方が集まっている話があったと思うんですけど、こういうときのスタッフの研修では、およそどういことを研修内容としているのか教えてください。

○平岩代表理事

なるほどありがとうございます。

「子どもの発達や特性に応じた関わり方」、「子どもの育ちとその地域のこれからを考える」、「子どもの声、願いに寄り添った居場所をつくるには」、「多様な子どもの育ちを支える地域の力」、「新年度に向けて子ども支援の基本と実践」こうしたテーマですね。

基本的なことから、昨今大事にされている、「子どもの声に応える」、また「環境づくり」などを行っております。勉強会の中で「次回何やりたいですか」なども聞いて、年に数回研修をしております。放課後のことって多岐にわたっていますし、私たちは本当にプロの仕事だと思ってやっているんですけども、なかなか学ぶ場がないというところがあります。子どもの声をベースにした放課後を作っていくってことを重要テーマにもって続けていっています。

口コミで広がってくれて、最初は500人ぐらいから始まったのですが、今は本当に北海道から沖縄まで全国から参加くださっています。みんなが勉強して、レベルアップしていくといいな、と思ってしております。

○稲垣委員

ありがとうございました。

私自身も子どもがちっちゃい頃、プレイパークとかずっと連れて行っていたので、子どもの自主性でやりたいことをやらせるというのは非常に共感して、すばらしいなと思って見させていただきました。

質問させていただきたいのは、うちの子どももやはり小学3年生になったらすまいるスクールに行かなくなってしまったんですね。行かずに家に帰ってきて、何をするのかといったらYouTube見ているとか、そういうことになってしまっただけ。それこそ体験の機会がなくなって思いながらいつもいたんですけど。

やはり3年生以降の子どもを、学童というかこのスペースに来させるための工夫とかが、何か行っていることがあったら教えてください。

○平岩代表理事

ありがとうございます。

千葉は高学年の参加率が非常に高いんですけど、習い事で高学年になっても来てくれるという感じです。

体操教室とかでは、やはり3年生ぐらいから体がさまざまなことができたり、バク転できるようになったりして面白いんですよね。なので、まさにこれではないかと思います。あともう1つ、子どもたちが自分たちで放課後を運営するんだという認識をどんどん持っていつてもらって、運営のボールを渡していっています。

例えば、おやつを発注するんですけど、そこを子どもたちにらせてみると。そうすると自分達で駄菓子屋をやりたいとか、カフェを経営してみたいとかって希望がでて、校内カフェをやっている子どもたちがいます。

それは1つの例ですけど、夏休みの夏祭りとか、ハロウィンのイベント、クリスマスだとかどんどんらせて高学年はもう自分たちでやります、という感じになっていきます。あと空間も分けることがあります。高学年用の空間を作ってあげます。学校内の施設は、そういう意味では施設の広さがあるので、使えば6年生まで十分いけるかなと思っています。すまいるスクールの

進化のポイントの1つは、そこにあるかなあと思っております。

○濱松委員

ありがとうございました。

アフタースクールのところで1点コメントさせてください。

私は3歳の娘がいるのですが、習い事とかこれから気にしだして、学童とかすまいるスクールとか、何か親が働く必要があるから、子どもに行かせておくみたいなところは、本来はそうじゃないってさっきおっしゃったところが、もう目から鱗というか、もう鳥肌立って。確かに当たり前のことなんですけど、子どもが何をしたいとか、子どものためにというのは、自分自身もそうですし、教育委員としても改めて考え納得しました。

○吉原委員

とてもいいお話ありがとうございました。

もう質問もたくさん出て、特別伺うことがないんですが、少しだけ小さいことです。

放課後の安心できる場所がたくさんあるほど、自己肯定感、将来の希望は明らかに増えているというのがあって、先ほどの最初のほうの資料ですが、年収との関係ですよねこれ。300万円がやはり1つ基準になっていたと思うんです。この、放課後を科学するということでさまざまなことが始められて、そのデータベースにのっとして始めたと思うんですが、安心できる場所というのは、具体的にどんなところだったのかなというのと、アフタースクールで行われているような、その課題設定するときに、安心できる場所ってことが、かなり、参考になっているかどうか。

それからもう1点、17時までは3500円。19時までは5,000円。あれもやりたい、これもやりたい、でもやっぱり5,000円は無理っていう人に対して、クーポンを出している自治体があって、その自治体っていうのは、全部ではないでしょうか。やっぱり、同じすべての子どもがやりたいことをやるという中で、あきらめちゃっているご家庭が出ちゃってるのかどうか、そのあたりを教えていただきたいです。お願いします。

○平岩代表理事

ありがとうございます。

最初は居場所要件の話かなと思うのですけれども、居場所という概念がこども家庭庁含めてよく出てくる言葉になりました。

こども家庭庁が当初言っていたキャッチフレーズは「居たい・行きたい・やってみたい」でした。「居場所かどうかを決めるのは子どもである」ということや、居場所というと場所をイメージするのだけど、時間とか人間関係とか含めて居場所なんだってことも居場所指針に書いてあります。

居場所というとなんとなく、おとなしくできる場所を用意するように思わ

れがちなのですが、そこにいるスタッフが大事だと思います。また、そこでいつも同じものしかなければ、つまんなくなってしまうので、新たな刺激や新たな出会いがあることも大切です。やってみたいで言うと、プログラムなどがあることはやはり大事な事かなと思っております。

その3要件を満たすようなことをやりたいですし、だんだん年齢が上がれば上がるほど、自分たちがそこで主体的に居場所の運営に関わっているんだという認識を持てるかどうかでやはり大事だと思います。子どもが市民先生しましたという事例も含めて、自分が誰かの役に立てる感覚もとても大事だと思っています。その辺を含めて、居場所と呼べるのではないかと思います。どうしてもスペースをイメージしちゃうんですけど、それだけではないということかなと思っております。

2つ目にいただいた費用の面の話です。ご紹介した自治体の仕組みですが、皆さん全員一律にかかるのが3,500円、学童利用する人はプラス5,000円をいただくので、学童の方は月8,500円をいただくようになります。低所得者のご家庭には負担が減りますので、ご家庭の年収にかかわらず参加できます。オプションとなるプログラム部分は、クーポンはないので、皆さん一律料金という形になっております。

もうひとつの自治体は、放課後が学童部分も含めて無償です。習い事部分については、費用をいただくんですけども、所得が厳しいご家庭に配られているスタディクーポンが使えるので、皆さん参加しやすい感じになってます。

ですので、もし品川区で有償のプログラムを入れようってなったら、できればクーポンを入れてあげて欲しいなと思います。じゃないと学校で体験格差が出る懸念があります。

学校内で格差が出る懸念に対しては、外ではもっと体験格差が出ているので、それを解消するためにやるということだと思います。外より安く実行され、そこにクーポンがあれば100点だろうと思います。

○区長室長

そのほか、よろしいですか。

それでは、こちらのほうで意見交換の方は終了したいと思います。

それでは最後に、森澤区長よりごあいさつをお願いしたいと思います。

○森澤区長

改めまして本日ありがとうございました。

朝の場所というのが今年始めようとしているところですが、放課後の居場所、先ほど、場所があればいいというわけでもないという話は本当にそうだなと。その質というのをやはり考えていかなきゃいけないんだなということを、放課後のポテンシャルということを改めて感じたところと、やはり、もともとすまいるスクールは教育委員会からスタートしているところ

も先ほどありましたけど、学校との連携、恐らく学校の教室を使うときの課題みたいなものはあるんだと思うので、そういったところをうまく連携をしながらですね、子どもたちのために一番よい空間とか、居場所づくりをもとにしていけたらなというふうに思ったしだいであります。

そしてまた、今年品川区は市民科をアップデートしていくというような取り組みを考えて、様々また参考にさせていただいて、考えていければというふうに思います。

本日、教育委員の皆さんもありがとうございます。意見交換だったら他区とか他の自治体の取り組みを知るとですね、いろいろ見えてくることがあるなというふうに思っておりまして、本当に今日は有意義なお話、大切なお話をさせていただいたというふうに思っています。

どうもありがとうございました。

○区長室長

それでは、これで令和7年度第1回品川区総合教育会議を終了したいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

—— 了 ——